



リハビリテーション科学部  
教授  
田村 至

### 「言語聴覚療法学科で過ごした34年間」

1992年4月に札幌医療福祉専門学校言語聴覚療法学科に赴任してから、心理学部、リハビリテーション科学部を経て、この春に定年退職を迎えました。これまで多くの先輩方を見送りましたが、このたび自分の順番がめぐってきました。私が言語聴覚士教育に携わった期間、資格に関して大きな変化がありました。赴任当初言語聴覚士は国家資格化されておらず、養成校もわずかで、本学園を含めても全国に5校程度しかありませんでした。1997年言語聴覚士国家資格が制定され、2000年から資格保持者が臨床現場で働くようになるまで、言語聴覚士(ST)は、国家資格のない状態が続いていました。国家資格制定以前に専門学校を卒業したSTは、現在は指導者として活躍されていますが、ST創成期の先駆者として、多大な苦勞を重ねたと推察します。その後、大学4年課程でのST養成が始まり、本学においても、2002年から心理学部、2015年からリハビリテーション科学部に言語聴覚療法学科が設置されました。国家資格ができたことでSTの教育システムが整備され、医療機関での地位も安定し、スタッフの増加とともに就職後の教育プログラムも充実しました。多くの医療機関で理学療法士(PT)、作

業療法士(OT)だけでなくSTも含めた3部門でのリハビリテーションが展開され、対象者に十分なリハビリテーションサービスが提供できるようになりました。STの重要性が認められて活躍の場が拡大した一方で、現在は全国的なSTの不足という課題があります。長年にわたり、「失語症」と「高次脳機能障害」に関する教育、研究、臨床を行い、「ことば」や「記憶」などの障害についての研究や臨床での知見を教育の場で伝達できたことは、楽しい経験でした。多くの卒業生が、次世代のSTを育てる指導者になっている姿をみるたびに大きな喜びを感じます。「ことば」や「記憶」など目に見えない脳機能障害の評価、治療には無限の難しさがありますが、一生を通して学ぶ価値がある分野と思います。身を挺して学ばせていただいた患者さんに感謝いたします。北海道医療大学で教育・研究に携わることで、多くの先生方や学生と交流できる場をいただいたこと、また「ことば」と「脳」についてさまざまな視点から考える機会が得られたことに深い充実感がありました。お世話になった先生方、学園関係者、卒業生、在学生の皆様へ感謝申し上げます。北海道医療大学の一層の発展を心より祈念いたします。



医療技術学部  
講師  
小野 誠司

### 「検査技師教育に携われた事への想い」

私が前職での定年が近くなってきた58歳の時に医療大学での教員へのお誘いを受け、59歳(2020年)に新規に開設される臨床検査学科の教員に迎えていただきました。前職は脳神経外科という病院でもあり、多くの患者様の様々な病態の変化や治療の甲斐なく最後を迎えられる方や、突然流行するいろいろな感染症に右往左往させられたり、新たな医療行為によって生まれる検査への対応、院内の多くの部署との調整を担当していたり、少人数での職場ということもあり、検査が関連する業務のマニュアル作成を行わなければならず、通常の検査の仕事以上の負荷が積み重なることもよくあり、ひたすらがむしゃらに勤務してきた中でも担当している検査の品質は患者様への最大の貢献であり、検査の技術向上には常に前向きに取り組んでいる毎日過ごす中、教員へのお誘いを受け、非常勤の講師などを経験し始めていたので、大学の教員のお仕事も興味がわき、2020年という令和に元号が変わると同じタイミングで教員

生活が始まりました。34年にわたる検査技師生活から、大学で助教からはじまった教員生活でしたが、検査学科の1期生から今年卒業の4期生まで関わらせていただき、自分の経験の一部は伝えることができたようにも感じます。昔以上に医療の変化も早く、さまざまな状況も講義の中では紹介できる内容を盛り込めたりも致しました。多職種によって行われる地域包括ケアセンター実習などを通して、検査技師の行える情報提供などにも参加でき、検査技師会の推進していた業務拡大に対する対応の側面を伝えることもできました。今後も様々な学生が入学され、多くの卒業生が巣立っていく事になると思いますが、北海道医療大学がますます学生の成長を促していく教育を推進されて卒業生の活躍を支える礎の形成に貢献されるよう願ってやみません。私は3月で定年となるのを契機に次のステップへと進んで行きますが、大学は教育の本質を今後も追い求めてください。大学関係者の皆様が目々々々進んでいかれますように。



予防医療科学センター  
教授  
岡村 敏弘

### 「北海道医療大学で定年を迎えるにあたって」

2018年6月に本学予防医療科学センター医療政策・医療管理学系の教授に就任してあっという間の7年10か月でしたが、実は1993年4月から本学の非常勤講師(当初は歯科補綴学、途中から歯科医療管理学を担当)をしておりまして、本学とは33年間という長い付き合いだったことになります。私は1985年3月に74期生として日本歯科大学を卒業し、1989年3月に日本歯科大学大学院歯学研究科臨床系歯科補綴学専攻(小林義典教授)を修了した後、日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学教室第1講座(旗手 敏教授)のもとで歯科助手を経て講師として研究、臨床・教育に従事しておりました。日本歯科大学在籍中に取り組んでいた研究と臨床は、咀嚼時の咀嚼系筋群の筋電図と3次元的下顎運動の同時計測による解析、篩分法による咀嚼能率の測定、下顎頭の3次元運動経路分析等による顎口腔機能の客観的評価、顎関節症の診断と治療法の確立、ブローネマルクインプラントチームの補綴責任者、在宅診療歯科診療チームの第1補綴責任者などです。そのようなことから、本学に着任後、各種咀嚼機能検査機器購入の要望書と予算請求を行い、保健所の許可をとって病院内に咀嚼機能検査室を設置し、小林國彦先生と一緒に咀嚼機能

検査マニュアルを作成しました。2016年度診療報酬改定で保険適用となった各種咀嚼機能検査は、その後の改定でも充実評価されており、今後の歯科における客観的な経過観察方法として重要な位置づけになると考えます。1992年8月から2018年3月まで、厚生労働技官として医療保険行政(保険医療機関及び保険医に対する指導と監査等)の業務に携わっていましたが、指導等で話す機会も多かったことから法律学を一から学び直し、慶應義塾大学法学部法律学科を2004年3月に卒業しました。慶應義塾大学法学部で医事法と刑事政策を担当されていた加藤久雄教授には在学中だけでなく卒業後もお世話になっておりましたので、本学歯学部で医事法学を私が担当することになったことは感慨深いことでした。

本学での7年10か月の間に、書籍(共著)1冊、原著論文4編、総説論文3編、学会座長2回、学会特別講演4回、学会発表18回、その他講演14回、学生講義等164コマさせていただきました。本学の教職員の皆様や学生の皆さんのおかげで大変貴重な経験をさせていただけたことに感謝するとともに、少しは本学に恩返しできたかな…とっております。ありがとうございました。



薬学部  
教授  
吉村 昭毅



歯学部  
教授  
越野 寿



歯学部  
教授  
入江 一元



歯学部  
准教授  
廣瀬 由紀人

以上の諸先生の他、  
薬学部 吉村昭毅 教授、  
歯学部 越野寿 教授、入江一元 教授、廣瀬由紀人 准教授が  
定年を迎えられます。ありがとうございました。

*With heartfelt thanks.*

## 2025年度 理事長表彰について

2025年度の理事長表彰式が、当別キャンパスにおいて2026年1月6日(火)に執り行われ、鈴木理事長より表彰状が授与されました。理事長表彰は、特に表彰の価値があると認められた方を対象に授与するもので2025年度は以下の方が表彰されました。

◇福祉マネジメント学科精神保健福祉学講座一同<代表:橋本菊次郎 看護福祉学部・教授>  
札幌刑務所における精神障害受刑者処遇・社会復帰支援モデル事業のメンバーとして協力し、その取り組みが全国的にも例がなく、複数の報道機関にも取り上げられるなど社会的・学術的に高く評価されました。



三国学長、鈴木助教、向谷地特任教授、橋本教授、奥田講師、鈴木理事長